

## 修士論文概要

### セネガル人女性の就業機会に対する 職業訓練校の役割 -ルーガ市職業訓練校服飾科を事例として-

氏名：柳井麗美

#### 研究の目的と方法

本研究の目的は、公的職業訓練校（Centre de Formation Professionnelle：以下 CFP）の服飾科が、ジェンダー規範のもとで暮らすセネガル人女性の就業機会をどのように創出しているのかを明らかにすることである。具体的には、女性たちが、なぜ一般的な仕立て技術の習得手段とされる徒弟制度ではなく、公的職業訓練校を選択するのか、またそこで習得した服飾技術は、卒業後の就業機会にどのように結びついているのかを分析する。

この目的のため、以下の三つの問いを設定する。第一に、セネガルにおいて女性が徒弟として学ぶことの困難を明らかにする。セネガルにおいて徒弟として学ぶのは主に男性であり、女性が徒弟として学ぶ機会は限られている。女性の参入には社会的・文化的な制約が存在している可能性がある。第二に、中退率が高く、卒業後の就業が必ずしも容易ではないとされる公的職業訓練校を、なぜ女性たちが選択するのかを明らかにする。第三に、CFPにおける学びが、卒業後の女性たちの就業機会にどのような役割を果たしているのかを検討する。

本研究では、これらの問いに答えるため、文献調査とフィールドワークを組み合わせ分析を行う。まず文献調査では、先行研究に加え、政府および国際機関の統計資料やダカール市国立公文書館の資料を用い、（１）セネガルの教育制度、とりわけ公的職業訓練と徒弟制度の制度的枠組みと実態、（２）女性の家庭内労働や教育・就業におけるジェンダ―格差および関連政策、の二点から整理・検討する。つぎにフィールドワークでは、

（１）女性の家庭内労働、（２）公的職業訓練校服飾科、（３）仕立て屋のアトリエの三つを対象とし、女性の社会的位置づけを把握するとともに、公的職業訓練校と徒弟制度における学習方法や技能習得の特徴、卒業後の進路を比較分析する。具体的には、まず調査協力者の家庭において、女性の家庭内労働の実態調査を行なった。つぎに、ルーガ市の職業訓練校では、授業・試験の参与観察および関係者への聞き取りを行なった。最後に、仕立て屋のアトリエでは、参与観察と聞き取りを実施した。これらの調査から、女性たちの職業選択や学びの過程、その成果と制約を社会構造との関係から分析し、公的職業訓練校服飾科が女性の就業機会に果たす役割を明らかにする。

#### 論文の構成

##### 第1章 序論

- 第1節 研究の背景と問題の所在
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成
- 第2章 セネガルにおけるジェンダー規範と教育・職業訓練制度
  - 第1節 セネガル概要
  - 第2節 女性の社会的位置付けとジェンダー課題
  - 第3節 教育制度概要と課題
  - 第4節 公的職業訓練制度概要と課題
  - 第5節 徒弟制度概要と課題
  - 第6節 セネガルにおける女性の就業機会とその制約
- 第3章 家事労働がもたらす女性の職業訓練参加への妨げ
  - 第1節 調査地概要
  - 第2節 調査概要
  - 第3節 成人女性の家事労働
  - 第4節 女子及び女兒の家事手伝い
- 第4章 事例研究1:公的職業訓練校における学び
  - 第1節 調査概要
  - 第2節 ルーガ公的職業訓練校(CFP)概要
  - 第3節 女性のCFP選択と学びの制約:家事労働との両立に着目して
  - 第4節 CFPの学習形態
  - 第5節 CFP卒業後の課題と就業支援の取り組み
  - 第6節 小節
- 第5章 事例研究2:徒弟制度における学び
  - 第1節 調査概要
  - 第2節 仕立て屋概要
  - 第3節 女性の徒弟制度選択と学びの制約:家事労働との両立に着目して
  - 第4節 徒弟制度の学習形態
  - 第5節 「一人前」の仕立て屋に求められる技術
  - 第6節 小括
- 第6章 CFPで学んだ技術の展開と就業機会への影響
  - 第1節 調査概要
  - 第2節 卒業後に求められる能力とその展開:コンパニオン・CAP卒業生・親方の比較
  - 第3節 アテステクラス卒業後徒弟として継続して技術を学ぶ女性卒業生
  - 第4節 CAPクラス卒業後仕立て屋・縫製指導員として働く女性卒業生
  - 第5節 CAPクラス卒業後進学した男性卒業生

## 第6節 小括

## 第7章 全体考察

### 第1節 女性の家事労働がもたらす職業訓練機会の制約

### 第2節 ジェンダー規範下における女性と CFP の制度的意義

## 第8章 結論

### 第1節 CFP の再定位:ジェンダー規範下における女性の職業訓練・就業経路

### 第2節 課題と展望

参考文献／表一覧／図一覧／付録一覧／謝辞／付録

## 論文の概要

本論文は、8章から構成される。第1章では、本研究の背景と問題意識、研究の目的と方法、論文全体の構成を示した。

第2章では、まずセネガルの教育制度の概要を整理し、公的職業訓練校及び徒弟制度という二つの職業訓練の場の制度的枠組みを概観した。つぎに、セネガル人女性の社会的地位、教育・就労状況に焦点を当て、ジェンダー格差や就業上の制約について文献・統計資料に基づいて分析した。最後に、セネガルにおけるジェンダーと開発をめぐる政策的取り組みとその課題についても示した。

第3章では、ルーガ市のセネガル人女性・女子・女兒が行う家庭内労働が、職業訓練及び就業機会に与える影響を考察した。成人女性は活動時間の大半を家事に費やし、家庭や親族関係、文化的・宗教的慣習による時間的・社会的制約を受けていた。女子及び女兒も幼少期より家事の手伝いを通して家庭内における女性の仕事を学び、年齢が上がるにつれて家事労働の内容が高度化し、拘束時間が長くなる傾向がみられた。こうした家事負担の増大と社会的規範が、そもそも女性の職業訓練や就業機会への参入を困難にする構造的要因であることが確認された。

第4章では、ルーガ市公的職業訓練校（CFP）服飾科を事例に、訓練カリキュラムの実態と、学習内容がいかに就業機会へ影響を及ぼしているのかを分析した。CFPの学びは、時間割や学習カリキュラムといった制度的枠組みのもとで行われ、基礎技術を中心に理論的かつ体系的に習得される点に特徴があった。CFPのみで一人前の仕立て屋になることは容易ではないものの、基礎技術の習得は自宅就業の基盤となり、徒弟制度における応用技術の理解を促進する可能性が示唆された。このような制度的環境は、必ずしも卒業直後のアトリエへの就業や開業につながるわけではないものの、女性に一定の質の学習を提供しているため、長期的に再び仕立て関連の仕事を得たり、徒弟として学んだりすることを可能にしていることが確認された。

第5章では、ルーガ市の仕立て屋のアトリエにおいて、徒弟制度がいかなる訓練制度となっているのかを分析した。徒弟制度は、親族関係や地域ネットワークに基づく社会的仕組みとして機能し、観察・模倣と試行錯誤を通じて実践的に技能を習得する。しかし、長

時間滞在を前提とするため、家事労働を担う女性にとっては学習と家事の両立が困難であることが示された。CFP が制度化された効率的な学習を提供するのに対し、徒弟制度は経験的学習を通じて応用的・総合的な技能を形成する点に特徴があり、両者の差異が確認された。

第6章では、CFP 卒業生への聞き取り調査と観察から、習得した技術が卒業後どのように活かされているかを分析した。CAP 課程を卒業直後の生徒は、ごく基礎的な技術しか習得しておらず、現場で求められる技術のレベルには達していない。しかし、CAP 課程で学ぶ仕立ての基礎的な注意事項は、仕立て屋のアトリエでは軽視される傾向がある。そのため、卒業生が継続的に訓練を積み重ねることによって、それらの基礎的な注意事項こそが、現地の仕立て屋との差別化のポイントとなっていた。また、CFP で基礎技術を学ぶことで、アトリエで限られた時間だけ徒弟として働くことが可能になり、家事と両立しながらより高度な技術を身につけていくことが可能となっていた。

第7章では、以上の議論を踏まえて全体の考察を行なった。徒弟制度は、1日のうちのほとんどの時間をアトリエに滞在することを求める訓練制度となっていた。そのため、家事労働に従事する女性にとっては参加する機会が非常に限られてしまう。一方で、CFP では制度化されたカリキュラムが存在し、滞在時間が定められているため、家事と両立が可能となっていた。さらに、CFP での学習は、仕立ての基礎技術を習得可能にするため、卒業後に徒弟制度への参加や自宅就業を可能にしていた。すなわち、CFP での学習は、卒業後に一人前の技術を身につけるまでの段階的な学習過程を開き、長期的には女性の就業機会を拡大していた。すなわち、徒弟制度と CFP は、女性の就業機会の拡大に、相互補完的に機能していると考えられる。

第8章では、本研究の成果を総括した。CFP は基礎技術習得の「入り口」として機能し、その後の徒弟制度や自宅就業と組み合わせることで、段階的な職業的自立を支えている。つまり、CFP は家事労働に従事しなければならない多くのセネガル人女性にとって、卒業直後の就職には必ずしも結びつかないものの、長期的には就業機会へと接続する訓練制度であると言える。

本研究の意義は、職業訓練を女性の生活世界から捉える視座を提示した点にある。本研究は、家庭内労働・徒弟制度・公的職業訓練校という三つのフィールドから仕立ての訓練を分析した。これにより、女性の職業訓練を、卒業直後の就業拡大や人材育成の観点にのみ限定してきた従来の理解や、職業訓練を単独で完結する制度とみなす枠組みの再検討を促した。一方で本研究の課題は、調査対象となった女性や女性生徒たちの社会的な位置付けや、本研究の議論が仕立てという職業分野を超えてどの程度一般化可能であるのかが不明であることである。とはいえ本研究が、今後のセネガルにおける女性の職業訓練のあり方を検討する一助となれば幸いである。